

527

36

地方改善事業双書 3

国立国会図書館



始



トコW-72

52
J

地方改善事業叢書

廣島高等師範學校長

吉田賢龍氏講演

教育及宗教上より觀たる

地方改善事業

財團法人 中央社會事業協會地方改善部

第三輯

地方改善ニ關スル内務大臣ノ訓令

内務省訓令第二十二號

北海道廳 府 縣

國家ノ健全ナル發達ハ國民ヲシテ各其ノ志ヲ遂ゲシメ國內諸方面ニ互リテ相互ニ克ク協調諧和ノ實ヲ舉グルニアリ予ノ内務ノ局ニ當ル常ニ此ノ心ヲ以テ事ニ從ヒ其ノ實行ヲ期センコトヲ念トセリ願ルニ明治維新ノ初 先帝畏クモ五箇條ノ御誓文ヲ發セラレテ舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ志クベキ旨ヲ宣シ給ヒ尋テ明治四年八月太政官布告ヲ以テ一部國民ニ對スル從來ノ稱呼ヲ廢シ身分職榮共ニ何等差別ヲ設ケザル旨公布セラレタリ爾來茲ニ五十有餘年此ノ間中央地方相共ニ力ヲ合セテ地方改善ノ事業ニ勉メ其ノ成績漸次見ルベキモノアルヲ致セリト雖然モ今尙國民ノ間ニハ因襲的偏見ヲ脱却スル能ハズ依然トシテ融和ヲ缺クノ憾ナシトセズ今ヤ世界ノ各國ハ人類相愛ノ大義ニ依リテ社會ノ平和幸福ノ増進ニ銳意其ノ力ヲ致シツツアルノ秋徒ラニ差別的偏見ニ提ハルルガ如キコトアラムカ是實ニ社會ノ圓滿ナル發達ヲ期スルノ途ニアラズ各位ハ地方改善ノ基調先ヅ差別的偏見ヲ絶ツニアルヲ念ヒ克ク此ノ趣旨ノ普及徹底ニ勉ムルト共ニ最モ剴切有効ナル計畫ヲ立テ國民相愛ノ實績ヲ舉グルニ於テ遺算ナキヲ期セラレベシ

大正十二年八月二十八日

教育及宗教上より觀たる地方改善事業

大正
13. 13
内交

地方改善ニ關スル内務大臣ノ訓令

内務省訓令第二十二號

北海道廳 府 縣

國家ノ健全ナル發達ハ國民ナシテ各其ノ志ヲ遂ゲシメ國內諸方面ニ亙リテ相互ニ克ク協調平和ノ實ヲ舉グルニアリ予ノ内務ノ局ニ當ル常ニ此ノ心ヲ以テ事ニ從ヒ其ノ實行ヲ期センコトヲ念トセリ願ルニ明治維新ノ初 先帝長クモ五箇條ノ御誓文ヲ發セラレテ舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ志クベキ旨ヲ宣シ給ヒ尋テ明治四年八月太政官布告ヲ以テ一部國民ニ對スル從來ノ稱呼ヲ廢シ身分職業共ニ何等差別ヲ設ケザル旨公布セラレタリ爾來茲ニ五十有餘年此ノ間中央地方相共ニ力ヲ合シテ地方改善ノ事業ニ勉メ其ノ成績漸次見ルベキモノアルヲ致セリト雖モ今尙國民ノ間ニハ因襲的偏見ヲ脱却スル能ハズ依然トシテ融和ヲ缺クノ憾ナシトセズ今ヤ世界ノ各國ハ人類相愛ノ大義ニ依リテ社會ノ平和幸福ノ増進ニ銳意其ノ力ヲ致シツツアルノ狀徒ラニ差別的偏見ニ提ハルルガ如キコトアラムカ是實ニ社會ノ圓滿ナル發達ヲ期スルノ途ニアラズ各位ハ地方改善ノ基調先ヅ差別的偏見ヲ絶シニアルヲ念ヒ克ク此ノ趣旨ノ普及徹底ニ勉ムルト共ニ最モ對切有効ナル計畫ヲ立テ國民相愛ノ實績ヲ舉グルニ於テ遺策ナキヲ期セラレベシ

大正十二年八月二十八日

教育及宗教上より觀たる地方改善事業



大正
13. 9. 13
内交

例言

一、本叢書は財團中央社會事業協會地方改善部大正十二年度事業の一として福岡市(九州方面)、廣島市(中國方面)、京都市(近畿方面)、津市(東海方面)、金澤市(北陸方面)、埼玉縣熊谷町(關東方面)の六ヶ所に於て開催地府縣と本協會と聯合主催の下に、其附近の各府縣より推薦された講習員に對し、斯道の専門講師を聘して融和促進に關する講習會を開いた際の講義の速記を印刷したるものであります。



教育及宗教上より觀たる地方改善事業

廣島高等師範學校長 吉田賢龍氏講演

今日お話し申すことに就て長田教授と十分打合せの暇もありませんでしたから或は話が二重になる様なことも有りはしないかと思ひますので、其の邊のことはお断りして置きます。

今日地方を改善する其の要は何處に在るかと言へば、つまり人物を造るに在る。立派な人物さへ造れば地方が改善されるのであるから、人物本位の地方が出来れば、それに越したことはないと思ふ。

現代は總て人物本位で行かふとする。昔ならば何かの官職には門閥とか地位とか云ふ様なことが關係したけれども、今日は寧ろ人物の質が要件である。或は結婚をするにも其の門地が何うであるとか職業が何うであるとか云ふことよりも、人物本位に依

つて嫁も貰へば婿も取る。人物本位と云ふことは今日の時代を貫通する中心的な現象と謂つて宜しいと思ひます。従つて立派な人物でさへあれば其の人は一番價値のある人間なのだからして、立派な人物が早く出来れば、それに依つて地方が改善される。而して立派な人物を造ると云ふことが教育の條件なのでありますから、其の點から見れば今日は教育と云ふことが最も大切な事になると思ふのであります。先般御降しになりました詔書の中にも其の點を仰せられました。「是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ」と斯うあります。つまり日本國民の基礎を造ると云ふことが明治天皇陛下の思召の大眼目で、それには意を教育に留めさせられた。其の教育と云ふのは、學校教育もありませうし、又社會教育もありませうし、或は教會の教育、寺院の教育と云ふ様に、廣い意味であらうと思ふのであります。さう云ふ社會教育なり、學校教育なり、或は宗教の方に依る教育、それ等を皆含めて仰せられて居ると思ひますが、さう云ふ風に、凡て今日は人物本位で行かねばなりません。然らば其人物と云ふのはどう云ふ人物であるか、又其の人物を造るに何う云ふ風にして造つて行くのか。斯う云ふことになつて來るのであります。

それは眞に人間としての本能を十分に發揮する所謂人間らしい人間である。そこで

人物と云ふことの第一要點は、先づ人間と云ふことの自覺に在ると思ふのであります。人間自身が、人間と云ふことに對する深い自覺がなければならぬ。教育と云ひ宗教と云ひ、其の基づく處の根本は其處に在ると思ふ、殊に此點は今日の時代思想の源を成して居るとも謂へる。言葉を換へて言ひますと、此の世界及人生總ての活動、總ての統一は皆其の深い人間としての自覺から顯はれると云ふことになると思ふのであります。宗教と云ふもの、根本も、又教育と云ふもの、根本も其處に在る。吾々人間は、人間である以上、總ての外的條件は如何であらうとも、それ等を總て問はず、皆人間としての心の奥に大切な寶を抱藏して居る。其の寶を發揮すると云ふことが是が宗教の本質であり、教育の本務であるのであります。即ち吾々人間として如何なるものか、雖も、苟も人間たる以上見逃すことの出来ない大切な一つの寶を奥深く抱藏して居る、其の寶を開き顯はすのが人間としての責任であり、又義務である。本當の人間としての自由なり、平等の天地が其處に横はつて居る様に思はれる。近代思想の言葉で申しますと、人本主義——人間本位の主義。言葉では如何にも、容易い様で何でもない言葉であります。然し乍ら非常に意味の深いものであります。吾々は如何なる形をして居ても、如何なる境遇に在つても、苟も人間としては、其の無上の寶を有つて居つ

て、それが人間の本性となつて奥深く藏せられて居て、何時かの機會には必ず顯はれて来る。今は隠れて居ても、何時かは顯はれて来るに違ひない、さう云ふ人間と云ふものに對する自覺が今日の思想の骨髓と謂つてもよいと思ふのであります、併し、それは今日に於て始めて顯はれた思想と云ふ譯ではない、勿論昔からあるのであるが、唯今日にあつては特にそれが著しくなつて宗教教育の基礎的精神となつて來たのであります。

吾々は、成る程表面は斯うした五尺の體軀である。斯う云ふ體軀は時日が経てばダン／＼衰へもする、仕舞には死んで腐つてしまふ、随分憐れな體軀である。物質的には何等尊い處も偉い處もなさうに見えるが、然しながら吾々の精神と云ふものには自身を顧るといふ力を與へられて居る。人間は其點に於て他の動物と違つて居る。他の動物ならば、他を見るばかりで、自分自身といふものを顧る力が與へられて居ない。吾々には此大事な力が與へられて居る。さうして吾々が吾々の内的生活にダン／＼入つて行つて見ますと、吾々は其處に清きもの、美しきものを見出さざるを得ないのであります。即ち表面に顯はれて居る處のものよりも、奥深く吾々の内的生活に進んで行けば行く程、吾身ながら偉大なものが潜んで居ると云ふことに驚ろかざるを得ない

のであります。

人間はいくらでも自己の内部に進んで行くことが出来る。例へば、今私は斯うして皆さんにお話しをして居るが、此皆さんにお話しして居る私の背後に又私が控えて居る。私が若しも自分と云ふものゝ内部に深く振反つて見ると、モウ一つ私があると云ふことが分かる。即ち皆さんにお話しして居るのを見て居る私がある。私が今皆様に御話をして居るぞと思つてゐる私があることは一寸自分の内部に立入つて見れば直ぐ判る。それから又もう一つ入つて見ると、其の皆さんにお話しして居るのを見て居る私を又見て居る所の私がチャンと背後にある。今皆さんにお話しして居るのを、チャンと監督して居るのを監督して居る私が又背後に居る。是は幾らでも盡きない。幾らでも奥深く吾々の内部に入つて行くことが出来る。或る人は恰度韭の皮を剥く様なものであると云ふたが、韭の皮は幾らでも剥ける。一つ剥くと又一つ、然し韭の皮は遂には盡きてしまふ。だが、吾々の自我の皮は幾ら剥いても盡きる處がない。さうしてモウ一つ大事なことは、ダン／＼と内部に入つて行けば行く程純粹なものになつて行く。純粹な自我と云ふものがダン／＼顯れて来る。此處に見える此の私が一番表面に顯れて居る自我で、それは物質界と直接に交渉して居る。さうして此の自我は普通の言葉で申し

ますならば、所謂功利的に活動して居る、功利的色彩を帯びて居る。と云ふのは表面に現れた所の此の自我は皆何か爲めにする所があるのです。或は金が慾いとか、或は何かの慾望を満足させようとか、其爲めに動いて居る。之を名附けて功利的と云ふ。例へば憐れな人に物を施すのも、それを施して、其れに依つて社會の信用を得やうとか、自分の商賣を繁昌させようとか、さう云ふ様に一寸お爲めにする所がある。之が即ち功利的であります。私の此の外に顯れて居る自我の活動と云ふものは、實に功利的な色彩を帯びて居る。處がダン／＼内部に入つて行きますと、物質界の影響を受けることがダン／＼薄くなる。薄くなればなるほど、私の内的生活と云ふものがダン／＼功利的の活動から遠ざかつて、さうして何等おためと云ふこととなく、人を救ふのに何の爲めと云ふことはなく救ふ爲めに救ふのである。又人を愛するにしても愛する爲めに愛するといふことより外に何も無い。さう云ふ純粹な愛、純粹な自我にダン／＼深く入つて行くのである。

現代のフランスの學者で名高いベルグソンと云ふ人はそれを地球に譬へた。地球の表面は空氣に觸れて居て、空氣に觸れて居る處は皆それが岩石化して居る。然し乍らダン／＼地球の内部に入つて行くと、深く入つて行けば行く程、空氣の影響を受ける

ことが少くなればなる程岩石化することがダン／＼遠ざかつて地球物素と云ふものを以て成立つやうになる。是はベルグソンが地質學上から云ふたのでないのです。地質學者の方から云ふと、そんな事はないと云ふかも知れないが、ベルグソンは吾々の内的生命に譬へるつもりで然う云ふのです。斯う云ふ様にダン／＼内部に入れば入る程純粹の地球物素になると同じで、吾々の生命の事を考へると、最も外部の表面即ち物質界と交渉して居る自我は、皆功利的な色彩を帯びて居るが、ダン／＼内部に入れば入る程吾々の深い自我は何等おためと云ふことなく、何等他の爲に役せらるゝことなく、何等敵本主義でなく、眞の慈善の爲めに施さんとし、愛其のものゝ爲めに愛すると云ふ様に功利を超越した自我に入ることが出来る。之は如何なる人と雖も皆さう云ふ如い處に入つて行くことが出来る。そこで吾々は自分に尊いものを有つて居る、斯う云ふことに吾々自から驚かざるを得ない様になつて来る。そこで始めて人間と云ふものゝ偉い價值が顯はれて来る。釋迦の悟りと云ふも、キリストの自覺と云ふも、或は又徳の極致と云ふも、つまり其の奥深く入つた所に一つの純粹な自我を見出したと云ふ處に基いて居ると思ふのであります。

そこで先づ釋迦の自覺りの事ではありますが、元來印度にありて釋迦以前の婆羅門教の根本思想を説いてある典籍を優婆尼沙土と云ふのでありまして、其の優婆尼沙土の教へる處は何であるかと申しますと、つまり前申した處に歸着するのですが、所謂第一義諦の眞理と云ふものを探して行くと、仕舞には其れはお前の内にある……其れはお前さんだ……人間自身だ——斯う云ふ處に歸着するのです。婆羅門の教に於ても色々の神々が澤山あります。客觀的に神を崇めるけれども、其根本の神は矢張り人間を超越しない神である。終局になると人間其ものが餘程力強いものになつて來る。元來印度民族は天然崇拜ですから天然の總ての現象をばみな人格化して神として崇拜したそれで色々の神様がある。風の神、火の神、太陽の神、月の神と、其他澤山の神々があります。其の中に於て一番大切なのは梵天(ブラフマン)と云ふ神様です。

此の梵天と云ふ神様はどう云ふ神様であるか。元來神様と云ふものは實に偉いものである。吾々に幸福を與へる、時には又吾々に對して禍をも與へる、かく神の勢力と云ふものは偉大なものである。處が神をして吾々に禍を與へ或は幸福を施さしむるものは誰であるかと云ふと即ち此の人間である。此人間の祈禱と云ふ力が神をして幸福

を與へしめ或は禍を與へしめる。斯うすると神様と云ふものは偉いものであるけれども、其の神様を動かす人間の祈禱の力も亦偉大なものである。そこで人間の祈禱と云ふものを人格化してしまつて、それが神となつたのが所謂ブラフマンである。則ちブラフマンと云ふ神様は人間の祈禱が人格化したものである。すると人間以外の神様よりも寧ろ人間と云ふものが偉いと云ふことになつて來る。だから本當に根本の眞理と云ふものを求めて行けば即ち汝と云ふことに歸着するのであります。其の思想が佛教に至つて發達して、佛教の所謂平等主義の思想の根柢となつたのであります。

佛教に於ては釋迦と云ふ人が大變偉い。處が釋迦は迦毗羅城の王太子として生れた。即ち此の世に生れた一個の人間であります。其の人間が唯の人間として奥深く有つて居る處の所謂大切な内的生活——大事な人間の寶を啓き現はした。其處が偉いのである。其の釋迦に對して梵天、帝釋等の婆羅門教のいろ／＼の神様供養尊敬到らざる處がない。一個の人間の釋迦を神様が擁護する。佛教の思想は其處にある。人間と云ふものに偉大な力を見出すと云ふのが佛教の根柢であると思ふ。そこで釋迦の悟りと云ふものは、即ち菩提樹の下で悟つた其悟りと云ふものは、吾々が能く味つて見る必要があると思ふのであります。

釋迦は所謂人生問題に就て疑惑を起して、真理と云ふものを方々捜して歩いた。處が、どうも真理に到達することが出来なかつた。迦毗羅城に居る時もいろ／＼の國中の聖賢に接して見たが疑惑の解決が出来なかつた。そこで山に隠れて居る所の仙人に偉い人があつて根本の真理を教へて貰へやうと、斯う思つて山に入つて、跋伽婆仙人、阿羅邏仙人、其他いろ／＼の聖者を歴訪して人生の真理を聞いたけれどもどうも満足なる解答が得られなかつた。それから今度は六ヶ年間、苦行林に入つて非常な禁慾的な苦行をした。これは道を求めるには命懸けでなければならぬ、苦行を恐るゝに及ばぬと思つたからである。然るにそれも徒らに身を苦しめるのみで、本當の悟りに到達することが出来ないといふことが分つた。そこで苦行林を捨て、今度は菩提樹の下に於て靜かに端坐して考へた。此の時代は釋迦の大切な危機です。捨て難き王城を捨て、離れ難き妻子と離れ、さうして山へ入つて六ヶ年も苦行をやり続けながら尙真理は求められなかつたのである。そこで釋迦も胸中に大に動搖を來したに違ひない。是が釋迦に取つて非常な危機であつたのです。經の中には菩提樹の下でいろ／＼の惡魔が釋迦を誘ひに來たことを書いてある。これは釋迦も既往の經過に鑑みて或は弱い心も起つたでありませう。或は今迄肉體上の慾などを色々な方法で抑えつけて來たのである

が今や其反動も起つて之を裏切つたこともありませう。かく菩提樹下の惡魔來襲は釋迦の内心の動搖を示したものでありませう。處が釋迦はそれ等の胸中の波瀾を鎮めて靜かに考へて居ると、豈圖らんや、今迄外に求めて居た處の真理がチャンと自分の心の内に流れて居る、釋迦の内的活動の底にあり／＼と流通して居ると云ふことを見出した。

其の時の釋迦の欣びは非常なものであつたでありませう。經文に書いてある所を見ると、實に天に昇り地に躍ると云ふ欣びであつた。天地が六種に震動した如く感じたのである。其の自分の心の内に見出した大切な真理と云ふのは何でせうか。即ち先申した様に吾々の内部に入つて見ると其處には實に功利を超越した純粹な自我と云ふものが存在して居て、それを釋迦が見出したのである。其の時には自分乍ら自分の偉大さに驚くばかりであつたので、天上天下唯我獨尊と其の時始めて叫んだ。

彼の支那の蘇東坡と云ふ詩人が歌ふた詩を私は大變面白い詩と思ひますので、よく之を引合ひに出しますが、冬枯の季節に春と云ふものを探して歩く詩です。

盡 日 尋 春 不 得 春

芒 鞋 踏 遍 隴 頭 雲

歸來閑嗅梅花立
春在枝頭已十分

寒天の時季に、春を探して歩いてても一向春らしい處がない、鞋掛腰辨當で山野を跋涉して尋ねて歩いてても一向春らしいものがない、滿目蕭條として冬枯れの景である、失望して我家へ歸つて軒端に腰掛けて居つた處が、今や綻びかゝつた庭の梅の花がある。匂ひを嗅いで見ると豈圖らんや、春は既に自分の家の梅の枝にチャンと來て居つた。それを知らずに野に山に春を尋ねて歩いたことの愚かさよ。斯う云ふ歌です。是は蘇東坡が釋迦の半生を歌ふ氣で作つたものでは決してないが、然しながら吾々の方から云へば是は釋迦の半生を縮寫したものと見る事が出来ると思ふ。釋迦は方々廻つて歩いたが何も眞理を求め得なかつたが、自分と云ふものゝ内的生活に入つて見たらチャンと其處に大切な眞理を見出した。吾々の心の外側にはいろいろの欲望がありいろいろの邪念があり色々功利的な活動を取り交へて居るが、然しながら内部にダン／＼這入つて行くと、其處に純粹な美しい流れがある、穢濁な生活の中に或る清らかなものが煌めいて來る。それが即ち釋迦が無我を悟つた所であります。無我と云ふことを今日の言葉に翻譯して見るならば、即ち功利を超越した一つの流れで其れを吾々の心の中

に見出したのである。つまり人間と云ふものゝ本當の尊さが判つて來たのである。

三

(以上第一日)

昨日は人間を本位とせる釋迦の悟りと云ふ處までお話をしたのでありますが、其の釋迦の悟りと云ふものは、吾々の内的生活には實に尊嚴な偉大なものが流れて居ると云ふ處に目覺めたのであります。是は各自が自分で自分の内心に奥深く這入つて見れば如何なる人も其處に到達しなければならぬ、私共が斯う云ふ物質的の生活をやつて居りまする其の様子を見ますれば、皆何か或ものを攫まうとして其の爲に齷齪して居る。即ち或は衣食の爲とか或は名譽の爲とか或は又何か自分の子孫の爲と云ふやうな、さう云ふ、或る他の目的のために皆活動をして居るけれども、其の内面に立入つて見るといふと、所謂功利を超越したものが其處に潜んで居ると云ふことを認めざるを得ない。則ち名譽の爲とか衣食の爲と云ふやうな、さう云ふお爲のためでなくして、眞に人を愛するならば、愛する爲に愛して居る、或は社會の爲に働いて居るならば、社會の爲に働くと云ふことの爲に働く、斯う云ふに功利を超越したのも矢張り其處に潜んで居ると云ふことを如何なる人も認めざるを得ない。神戸の鈴木某といふ豪い

金持——一億圓とかいふ金持がある。其の主人公は七十歳以上のお婆さんださうである。もう其れだけの金が有れば澤山で、其れ以上の金は要しないでせう。けれども尙儲けやうとする、其の上にも儲けやうとする。それは必ずしも金といふものを儲ける爲の活動とは見られない。矢張り其の裏には、働く爲に働く、さう云ふものが潜んで居ると云ふことは吾々も認めざるを得ぬ。鈴木某が自分の内心に立入つて見たならば矢張りさう云ふ風に感ずるであらうと思はれる。外部的の吾々の生活を眺むれば誠に淺ましいもののみでありますけれども、併ながら内部にはさう云ふ尊いものが閃いて居るのである。

真宗の教には機法二種の深信と云ふことを説いて居る。一方に於ては自分の罪惡を信じ又一方に於ては佛の力を信ずる。是は支那の善導大師が説いたのであります。即ち一方から見れば罪惡の塊まりであるが併し罪惡と云ふことを自覺するのは其れは吾々の内部に偉大なるものが有るからである。何も無ければ罪惡を自覺することは出来ない。吾々の心の奥に寔に美しい鏡が藏せられて居るからして吾々の罪惡が罪惡として其處に映つて來るので、罪惡と云ふ自覺は確に内心に偉大なものが有ると云ふことを證明して居る。此の點は釋迦ならずとも如何なる人も其處に到達しなければならぬ

い。而して是は各自に其れを悟ると云ふことより外に途はない。此の姿は實は口で説くと云ふことも出来ない。自分の心持を自分で知るより外に途がない。釋迦も菩提樹の下に於て悟を開いた時の本當の心持は到底口に言ひ表はすことは出来なかつた。七日の間菩提樹の下に於て靜に自分の心を觀察して其れを樂んで居られた。其の時には其れを口に言ひ表はすといふと、もう真相から第二流に下がるのです。人に説いて聽かせるといふと個々の人がそれを聽いて本當の心持を傳へられることが出来ないのみならず却て誤解を生ずると云ふのは、世間の人が皆所謂功利主義の道德に沈んで居る、功利の海に沈没して居るからである。即ち私共が善い事をするると云ふのは善い結果を得やうといふ爲であり、悪い事をしてはいけなと言ふのは悪い結果を恐るゝ爲である。皆それはお爲である。即ち外の事に支配される。さう云ふ風に世間の人が皆思ふて居る。さう云ふ處へ持つて行つて、若し自分の心の内の、所謂自律的の道德を釋迦が説くどうなりませうか。自律といふのは外の事に支配されないのです。例へて申せば、今私が仕事をするのが衣食の爲であると云へば衣食の爲と云ふことが第一義になる。仕事をするのが衣食の爲の方便である。若しも私が人を愛すると云つても、其の愛することが名譽を得たい爲ならば、名譽を得ると云ふことが目的であつて、其

れは他律となる。所が然うでなく、愛するのは愛する爲の愛だと云へば其れは自律となる。其れ自身に依つて行くのであつて、外の事の爲に律せられるのではない。所が滔々たる世間の人は皆此他律的の道德に沈んで居る。私が爰で謂ふ道德とは廣い意味であります。宗教も此中に含まれてゐるのです。則ち俗的宗教も皆他律的です。神を敬ひ佛を念じて何か善い御利益を得ようと云ふのは功利的である。即ち他律的であつて宗教の所作といふものは方便となるのです。此の世で得られなければ未來で得ようと云ふのも矢張り他律的です。さう云ふ様な他律的な道德宗教が世間に信せられて居る處へ釋迦が自律的な宗教自律的な道德を説くならば世間の人は驚くでありませう。却てどんな危惧心を起すかも知れぬ。第一義諦と云ふのは、一方から言へば甚だ危険で、正宗の名刀の様なものです、子供に持たせたならば怪我をする。今日の時代でも矢張り然うでせう。私が今爰で申す様なことは若しも一般の善男善女に説いたならば驚くかも知れぬ。釋迦が菩提樹の下に於て躊躇されたのも寔に意義ある哉である。華嚴經の説法と云ふのは其れです。菩提樹の下に一週間自分の心を觀察して自ら楽しんで居られた其の有様を述べたものです。所謂自律的な宗教自律的な道德を説いたものが華嚴經である。けれども釋迦をして依然として菩提樹の下に坐つて自らを樂むこと

を得せしめなかつたものがある。それは慈悲心です。縦令疑はれやうとも誹謗されやうとも皆が苦みの海に沈んで居るのを見るに忍びぬと云ふので菩提樹の下から出て来た。さうして本當の教を即ち自律的な宗教を説かうとした。所が果して分らぬ。高尚な菩薩は皆了解することが出来たでせうが、其の以下の人間には皆分らぬ。鰥の如し啞の如しとあります。そこで釋迦も、ア、是ではいかぬ。直様自律的な宗教を説いては導くことは出来ぬと思つたからそれではお前達に分り易い法を説いて聽かせるぞ。即ち善い事をすれば善い果報が得られる、悪い事をすれば悪い結果を得られる、此の世に於て其の結果が得られなければ未來に得られるぞと、三世因果の説法をしたのが阿含の説法である。斯う云ふ風に因果を他律的に説明するのは決して第一義諦の教ではない、第二流第三流に落ちて居る。よく斯う云ふことを申します。世の中に隨分善い事ばかりして居つて而も善い果報が得られぬことがある。顔回と云ふ人は善人であつたが不幸短命にして死んだ。盜跖と云ふ盜人は悪い事ばかりして居つたが一生淫榮華に暮らして天壽を全ふして死んだ。實に天道是非かと云ふ嘆きが出て来る。即ち凡俗が思ふてゐるやうな因果の解釋を以てするならば斯る顛倒の事實は了解の出来ないことである。そこで佛教の方では是に對して三世因果を説いて此謎が立派に説明が

出来ること自慢するのである。此の世に於て果報が得られなければ未来で得られる。此世が過去の業報だと云ふこと、未来と云ふ事を説くのが其處で大事だとなるのである。併ながらさう云ふ様な風に吾々が望んで居るならば、即ち吾々が善い事をするのは後に何か物質的の快樂を得んが爲だと、さう云ふ風に希望してゐるならば、それは此の世であらうが未来であらうが矢張り他律的になる。併しさう云ふものでなければ智慧の程度の低い人間には了解が出来ないから、釋迦は阿含經に依つて、何でも善い事をせよ、然らすれば何時か善い事があるぞと云ふやうに説いたのです。

併ながら釋迦の本意は何處に在るか云ふと、其等を導いて本當の自律的の處に引張つて行かうとしたのである。自分が善い事をして其の結果大いに名譽が得られるかも知れぬ、衣食の賜物に預かるかも知れぬが、併ながらさう云ふ外の事に目をくれずして、唯善い事をするに云ふ爲に善い事をする。唯善なるが故に之を爲すと云ふ自律的の處へ導くのが釋迦の本意である。それが法華經に至つて愈々現はれた。斯う云ふ事になつて居る。法華經の教は即ち自律的の教である。吾々が何等外の事の爲に左右されないで、自分の人格を中心として其の人格から現れた所の行ひをして行く。其處に人間としての本當の値打がある。吾々が吾々の外の事の爲に従屬してゐない。其處

に吾々の偉い處がある。さう云ふ自律的の大切な寶を有して居る。若しも他律的の方から云へば、大切なものは吾々の眞の自我已外に有るのです。吾々が何か善い事をして其れを自分に取つて來やうと云ふのです。所が自律的の方から云へば、何も外に無い。唯吾々が自分で自分を啓き現して行く。即ち自分が善なりと信じて之を爲す。斯う云ふことで、何も外を望まぬのですから是は自分から啓き現して行くのです。故に自分で皆造り出して行く。造り出して行くから總てのものが皆我が物である。其の大切な處に到達したのが法華經と云ふことになつて居る。

法華經の中に名高い譬喩で長者窮子の喩と云ふのがある。或時一人の長者があつた。日本では年取つた人を長者と云ふが印度では大金持の事です。其の長者が自分のたつた一人の子を幼い時に絶縁してしまつた。子供は親から勘當されて、自分では生活が出来ないで長じて乞食の様な状態になつて長い間方々流浪して歩いた。所が長者は段々年を取つて、もう何時死ぬかも知れぬと云ふ時分になつて、始めて自分の跡繼のことを考へだした。さうして自分に一人息子があつたのを昔勘當したが誠に惜い事をした。あれが今自分の手許に居つたならば此の澤山の財産を譲ることが出来るのであると、非常に残念に思つて其の子を捜し出した。所へ息子が乞食になつて長者の家へや

つて来た。長者が之を見て、彼れは我が子だ、彼を捉まへろと云ふので、澤山の人が行つて、さあお前は此處の家の人だから来いと云つた所が、乞食は吃驚してしまつて、あんな事を言つて、どんな目に遭はせるかも知れぬと思つて逃げやうとする。引張らうとする。遂に氣絶してしまつた。そこで長者は餘り無理にしてもいけまい暫く解放して然る後方便を以て導くことにしやうとした。ところが其の子は矢張り乞食の里に行つて矢張り此方が樂だと言つて居つた。そこで今度は長者が自分の家の肥取りの男を乞食の處へ使はして、ごうだお前は乞食などして居るよりも彼處の長者の家の便所の掃除人になつた方が宜いだらうと導くと乞食は、さうですなこんな事をして居るよりも便所の掃除をさして貰つた方が増しでせう。それぢや爾うしなさいと。それから便所の掃除人になつた。さうして便所の掃除をやつて居る處へ、長者が傍らを通つて、お前は其れを一生懸命でやつて居るがよいぞ、俺はお前をこれから可愛がつて我が子と呼んでやるぞと云つた。誠に有難い。併ながら其の掃除人は、是は自分を恵んで我が子と呼んで下さるので本當は我が子ぢやないと、斯う思つて居つた。所で今度は、お前は誠に便所の掃除を一生懸命でする、是から庭掃きに上げてやると言はれた。位が上がつた。是は亦有難いと思つて庭掃を熱心にやつて居る。どうもお前は庭掃を眞

面目にやるから今度は會計係にしてやるぞ。會計係になつた。さうして自分は此の家の寶を扱つて居るけれども是は人の物だと思つてやつて居る。會計係を能くやるから今度は番頭にしてやるぞ。番頭になつた。番頭になつて長者の財産を自由に管理して居つたが是は人の財産を管理して居るのだと思つて居つた。所が長者が愈々臨終が近づいた時分に番頭其他の人々を集めて、此の番頭は實は我が子である、俺の有つて居る所の財産は皆此の人の物であるぞよと、此に於て初めて其の番頭は、イヤそれでは自分は本當に此の長者の子であつたかと云ふことが分つた。さうすると今まで人の物だと思つて居つた財産が實は我が物であつた。それを知らなかつた。自分がさう云ふ自分であつたことを知らないで人の物だと思つて居つた。それは間違ひであつた。自分にさう云ふ寶が元來備はつて居つたと云ふことが初めて分つた。是が長者窮子の譬喩です。

其れなのです。今迄は皆所謂他律的に、即ち外から或ものを得ようとしたのです。善い事をして善い結果を得ようと云ふのは即ち目的が外に在つた。所が愈々悟つて見るといふと何も外に目的が在るのではない。自分の内に在る。自分が一切の所有者である。吾々が何も望まず、自分が善と思ひ自分の爲すべき事と思ふ其れに依つて爲す。

さういふ點に到達したのが所謂自律的の道德であつて、法華經に至つて初めて菩提樹下の源に戻つた。

吾々は一つ斯う云ふ風なことを考へて見ます。例へば仕事をするに云ふことを一つ考へる。他律的の方からは、仕事をするのは何の爲にする、斯う云ふことになる。即ち必ず他に目的がある。仕事をするのは何の爲か。それは衣食を得る爲だ。衣食は何の爲か。それは命を繼ぐ爲だ。斯うなる。命を繼ぐのは何の爲か。さう云ふ風に段々推して自分に問ふて見るといふと、命を繼ぐのは働く爲だと、斯う云ふ風に本に戻つて来る。即ち自分の内心に段々尋ねて見るといふと、働くのは働く爲だと云ふことになる。だからして爲めと云ふならば其れ自身の爲めである。是に至つて吾々の道德は次第に第一義諦に入るのです。そこで宗教の方に於ても然うです。若しも何か他から結果を持つて来る爲に佛を信じ念佛を唱へる。例へば淨土に參らせて貰ふと云ふことの爲に念佛を唱へると云へば、それは第二流第三流に落ちて居る。佛を信ずると云へば、信ずると云ふことの外に何も無い。地獄に落ちやうが極樂に往かうが、そんな事は問はない、斯うならなければならぬ。其處の心持に依つて宗教も第一義諦の宗教になつたり或は第二流第三流の宗教に墮落したりする。所謂「親鸞は父母孝養の爲に

念佛一遍も申したること候はず」と言ひ、又一「親鸞は朝家の御爲に念佛一遍も申したること候はず」と。所謂お爲めの宗教、お爲めの念佛は功利主義である。之を超越して自律的のものにならなければならぬ。爰で申す自律的他律的と云ふことは自力と他力とか云ふ事とは違ふのです。他力の宗教に於ても矢張り自律的の道德宗教がありませう。自力の宗教の中に於ても他律的の宗教道德がありませう。詮する處、吾々の内部に功利を超越した所のさう云ふ一つの流れが潜んで居る。考へれば考へるほど人間の心と云ふものは實に尊嚴にして侵す可からざるものである、と云ふ其處に吾々の人格を認める。吾々が人格者であると云ふ根本の基礎は其處に在る。

四

今申した點は釋迦の悟りに就いて申したのでありますが、教育及哲學の方に於ても同じ事でありまして、教育と云ふものは宗教と其の極致の點に於ては同じである。佛敎の方に於て釋迦を元祖として居ると同じく教育の方で元祖として考へて居るのは希臘のソクラテスであります。ソクラテスは初めて人間と云ふもの、値打を見出した。其れ迄は人間と云ふものを餘り考へなかつたので、所謂自然世界を出發點として、此の自然の世界は何う云ふものから出來て来るか、何う云ふものに成り行くかと、さう

云ふ事ばかり研究して居つた。所がソクラテスに至つて初めて氣が着いた。今迄の人は大切なものを一つ見逃して居る。即ち人間自身と云ふものを観ずして唯自然の世界のみを觀て居る。非常な誤りではないか。一體自然の世界が斯う云ふ風に現れて居るのは何が爲であるか。人間なくして何うして現れるか。自然界の色々な法則、其れはつまり人間と云ふものが有つての法則である。人間がさう云ふ法則によりて世界を認めるのである。例へば其の時分には引力の法則などと云ふものは未だ發見されなかつたのですが、自然の世界には引力の法則が存在してゐると普通には考へられてゐるが若し人間と云ふものが無くても斯う云ふ法則があると思ふと間違ひである。つまり人間が自然界をさう云ふ法則を以て取扱つて居るのである。其處に初めて氣が着いたのがソクラテスである。それで人間と云ふものを今まで度外視して居つたのは大間違ひである。吾々は先ず吾々自身を知らなければならぬ。汝自身を知れ。是がソクラテスにとつて大切な綱領として出て來た。吾々は吾々自身を知らなければならぬ。吾々自身を知ると云ふと其處に非常な大切なものが現れて來るに違ひない。若しも吾々自身と云ふものを度外視して單に自然界を觀て行くと云ふと茲に思想界の混亂を來すのです。思想界の混亂と云ふことは既にソクラテス時代に現れて來たのです。と云ふ

のは、自然の世界に對する銘々の考が皆異ふでせう。或人は水から世界が出來たと云ふ、或人は空氣から出來たと云ふ、或人は火から出來たと云ふ。丁度印度の釋迦以前と同じ様に色々な説が出てゐる。さう云ふ處からして所謂懷疑説なるものが現れて來て、眞理といふものは人間に分らぬものである、分らぬからして人々の言ふ所が別々になつて居ると、斯う云ふことになつた。そこで吾々は眞理なんと云ふものは分らぬのであるから單に物質的に吾々の口を快くせしめ目を悦ばしめ吾々の耳を樂ましめてさうして仕舞に死んでしまへば其れでよいと云ふ感覺主義、刹那主義、便宜主義、享樂主義に陥るのである。又俺のやる事は何も人の知つた事でないから自分の思ふ通りやつて行けば宜いと云ふ氣隨氣儘の個人主義になつて仕舞ふ。さう云ふ風に思想界が陥つてしまつた。是等はつまり人間自身と云ふものを觀ないからである。

そこで吾々自身を觀るといふと何うであるか。成程自然の有様のみから觀るといふと皆個々別々である。其の間に統一と云ふことは無い。私の存在、他の人の存在、皆別々であるからして差別と云ふことより外に何も無い。自分々々の思ふ通りやつて居ると云ふことより外に仕方がない。所が茲に私自身を觀るといふと何うであるか。例へば私は茲に人と云ふ一つの觀念を有つて居る。是は私が有つて居る。然らば其の人

といふものは此の外界の何處に居るか。何處にも居ない。其處に居るぢやないか。イヤ是は吉田と云ふ人なんです。形容詞が附いて居る。吉田といふ一種特別の人です。人と云ふものではない。此處に居る。それは某といふ形容詞の附いた人である。それならば形容詞の附かない人と云ふものは何處に居るか。それは何處にも居ない。是か、是かと云つて持つて來ると、或る形容詞が附いた特別の人なのです。實際人と云ふ觀念に相當する存在は何處にも無い。そんなら人と云ふものは全く無いのかと云ふと、其れは概念として私の心に存在して居る。さう云ふ私の有つて居る人と云ふ概念に依つて私が自他の人生を統一するのである。實際の存在に於ては斯う云ふ風に皆異ひますけれども併ながら吾々は皆異つた中に人と云ふ一つの概念に依つて統一をする。其の概念は何處に在るかと云ふと私の内に在る。

そこで私の有つて居る其の概念を正しくして行かうと云ふ事が即ち教育の務であるだからソクラテスが始終云つて居る如く、教育と云ふものは産婆の様なものである。ソクラテスの母親が産婆であつたからソクラテスは産婆と云ふ喩を常に持つて來る。産婆と云ふものは何も子供を持つて來て授けるのではない。私は子供の時分には然うかと思つてゐました。妹や弟が生れる度に産婆が椽の下へ持つて來るのだと云はれて、

然うかと思つて居りましたが、今では然うでないこと分かりました。母親の胎内から出るのである。之を産婆は唯助けてやるのです。近頃では産婆といふ言葉は段々用ひられないで助産婦と云ふ。産む婆さんでもない。産を助けるのですから其方がよい。丁度それと同じく、吾々教育者も皆の有して居る概念を正く産出す様にするのであつて、吾々が持つて行つて授けると思ふと非常な間違ひである。皆の人の心の内に潜んで居る所の本當のものを段々引出してゆくのが教育の務である。此處も矢張り人間本位でせう。人間といふものは實に偉大なものを持つて居る。其の有つて居るものを旨く引出すので、決して教育者が持つて行つて授けるのではない。又古の聖人などが與へたと思ふのも間違ひである。古の聖人の作つた書物の中に道があつて其れを吾々が貰ふのだと、さう思ふのも間違ひである。古の聖人の教は道とか眞理とかいふ其ものではない。あれが月だぞと指さしをしへて呉れた指に過ぎない。其の指を月だと思つたら大變な間違ひだ。さう云ふ事を初めて示して呉れたのがソクラテスでありまして、其の意味から言へばソクラテスは教育の方の元祖である。

五

このソクラテスが人間の自我に醒めた處を承繼いで細かに説いたのが獨逸のカント

と云ふ學者であるのです。カントと云ふ人に至つて初めて人格といふ觀念が明になつて來たのです。それを詳しく申さなければならぬのでありますが、只要を約して斯う云ふ風にして所謂人格なるものが明かにされたことだけを申し上げます。

吾々は斯う云ふ世界を斯うして觀て居るのも、斯う云ふ世界といふものが全く自分の外に在ると思つて居る。斯う云ふ建物が此處に在る、又あゝ云ふ山が彼處に在る。それは自分と云ふものが無くつても其處に依然として建物があり山が在ると思つて居る。それは大變な間違ひです。つまり吾々が無ければ斯う云ふ建物が斯う云ふ風に存在して居るとか山があゝ云ふ風に存在して居ると云ふことが分らない。是は吾々が斯様な形にして見て居るのである。といふのは、斯様なものは皆空間の中に於て有る。又皆時間の中に於て存在してゐる。それから萬物皆因果の中に於て有る。因果の關係を脱すると云ふことは出来ない。即ち木の葉が一枚落ちるのも水の流れるのも皆因果の關係である。所が其時間空間因果なるものはどんなものかと云ふと、是は皆私のものである。斯う云ふものが客觀的に私以外に存在して居ると思ふのは間違ひである。時間空間因果といふものは畢竟此世界を経験する以前に私が有つて居る觀念である。何となれば斯様な必然的な、普汎的な觀念は局部的な差別的な外界の經驗から得られ

るものではありませぬ、此事に就ては委しく申さねばなりませぬが略しまして謂はゞ吾々は時間空間因果と云ふ眼鏡をかけて見て居るのである。それで斯う云ふ建物も成立つて居る山も成立つて居る。時間空間因果を取去つてしまつたら此の世界はどんなものかそれは分らない。唯斯う云ふ自然の世界が成立つて居るのは即ち私の時間空間因果といふものから謂はゞ造り出して居るのです。

もう一つは道德の世界です。是が今申す大切なものでありますが、この道德法なるものも、自然法と同じく必然的、普汎的なものであります。善惡と云ふ觀念は好惡、良否といふ觀念とは全く異つたものであります。この白墨は良いと申しますが、併しそれは私がこの黑板に字を書くために良いのであつて他のもの例へば赤ン坊などには良いとは云はれぬ。處が、善惡と私が判斷する場合には如何なる人にとつても、必然に善であり惡であるのです。最も私の善惡の判斷に對しては賛成せない人があるかも知れませぬ、併し私はそれに對して今は反對しても終局は私に賛成すべき筈であるといふ自信を以て善惡の判斷を言ひ現はしてゐます。斯様な必然的、普汎的な觀念は決して經驗に依て得たものでなく、直覺に由つて得たもの、則ち自我が造り出したものであります。又其の道德の判斷に就て見ますと、例へば、信用を得たければ正直にな

れ。或は健康になりたければ攝生を守れ。斯う云ふやうな判断は是は本當の道德判断かと云ふと然うは謂へない。何故かと云ふと、先刻お話をしたと同じに、正直を守るのは何の爲か。信用を得る爲だ。さうすると正直と云ふことは信用を得る爲の方便になる。信用が目的である。斯う云ふことになる。これは本當の道德判断とは謂へない。本當の吾々の道德の信念は正直の爲に正直を守ると云ふことより外に無い。吾々の道德觀念が何か他のもの、爲に左右されると云ふことであつたならばそれは眞の道德判断とは謂へない。即ち何者にも左右されないで唯自個目的の爲に動いて行くものでなければならぬ。乃ち條件附ではいけない。條件附の道德は二流三流に下る。本當の道德は無條件で進んで行くものでなければならぬ。即ち何等他の目的に支配されないもので、先刻申した自律的のものでなければならぬ。自律的といふ言葉は條件附でないと云ふ意味になる。而して其れには何う云ふ事が大切になつて居るか云ふと、吾々は自個の本當の確信に忠實であらねばならぬ。若しも吾々の確信を裏切る即ち他律的になる様な道德は第一義諦の道德ではない。吾々の道德に尊嚴があり品位があると云ふことは何う云ふ所から來るか云へば則ち其れが自律的であるからである。若しも道德が方便と云ふものに墮落してしまへば尊嚴もない品位もない。爰に品位尊嚴と云

ふものと價格と云ふものとは異ふのです。價格と云へば他の何者かに役立つといふことになるのす。道德が他の欲求に對して大切な品位があると云ふことは、それは自律的のものであると云ふことから來るのです。さういふ自律的意思のあるものを名づけて人格と云ふ。つまり何者にも左右されない自律的意思を有つて居るのを名づけて人格と云ふ。吾々は吾々一個の確信を有つて居る。さうして吾々は其の確信に忠實に進んで行くべき一つの自律的の人間である。さう云ふ自律的の人間を名づけて人格者と云つて居る。さういふ處からカントは吾々の品位擁護の法則といふものを道德の法則として立て、居るのですが、それは斯う云ふ法則なのです。汝自身の人格並に總ての他人の人格に於て人の品位を尊重せよ、而して人格を常に目的とし、決し之を方便として用ひてはいけない。斯う云ふのです。つまり人間の品位尊嚴の現れて來るのは即ち人格であるから、汝の人格及他人の人格に於て品位と云ふものを尊重せよ。而して人格が決して方便でないと云ふ意味は、私は私の人格を飽迄尊重しなければならぬ。此の私の人格は決して皆さんの人格の爲の方便ではない。又他人の人格を吾々は尊重しなければならぬ。その他人の人格は決して私の方便ではない。他人の人格は人格其れ自身に於て目的を有つて居るものであるから決して其れは私の方便と思つ

ては けない。例へば資本家は労働者の人格を尊重しなければならぬと云ふのは、決して資本家は労働者を自分の方便と考へてはいかぬ。又労働者は資本家の人格を尊重すべしと云ふのは労働者は資本家を自分の衣食の方便と考へてはいかぬ。即ち人格其ものを尊重する。斯う云ふことになるのです。それはお互に吾々が自律的の品位を擁護する 以である。吾々は互に人の人格を尊重しなければならぬ。其の人格を自分の方便としてはいけないと云ふことである。一方から申すと、先刻私が申したやうに、吾々は吾々の確信通りに行かなければならぬ。自個の確信を裏切ると云ふことになつたらそれは何よりも罪惡である。併ながら、爾う言ふとそれは非常な個人主義だと云ふことになる。一方から言 ば個人主義とも謂へませうが、併ながら此に至ると亦非常な團體主義である。吾々は他人の人格を尊重して其の人格をば決して方便としない、人格其れ人身を目的として尊重すると云ふのです。ら、是程の團體主義は外にない、吾々が他人の人格を尊重すると云ふのは、お婆さんが孫を愛護する様に、人形的に見て之を尊重してやると云ふのではない。人格其ものをば方便としないで目的として尊重すると云ふのですから是程の團體主義が何處にありますか。社會の結合が本當に鞏固になると云ふときには團體主義が飽迄も徹底しなければならぬ。今日其處まで徹

底して居ないのは残念でありますが、眞に社會結合が鞏固に行くには人格尊重といふ原理が十分に行はれなければいかぬ。段々さう云ふ風に進んで行くべきであると思ふ。カントは斯う云ふやうな道德法が吾々の心の内に潜んで居ると見たのである。汝の私慾の雲霧を拂つて靜に内觀して見よ。さうすれば斯う云ふ法則が現れて来るぞと。つまり吾々がさう云ふ法則を造り出して居る。自然界を時間空間因果と云ふもので造り出して居ると同じく、吾々は道德の世界をば吾々の有つて居る此の法則で造り出して居る。さう云ふ處からして吾々人間の心と云ふものに段々深く這入つて見るといふと實に何とも云へぬ偉大な尊嚴なものに遭遇する。カントは 申したやうなことをズツと書いて、其の仕舞には何とも言へぬ心の感激に満ちて居つた状態が見えるのです。カントは其の書物の最後に斯う云ふことを云つて居ります。

それを考へること屢々にして且つ長ければ長いほど益々新たに益々増して來る感嘆と崇敬とを以て心を満たすものが二つある。これは我が上なる星の輝く空と我が内なる道德律と、

世の中に考 れば考へるほど彌増しに吾々の感嘆と崇敬とを増して來るものが二つある。其の二つとは何かと云ふと、我が上なる星の輝いて居る空と、今一つは我が心の

内に在る道德法である。斯う云ふのであります。これはカントの名高い言葉であつて、カントの紀念の寺に彫付けてありますが、つまり斯うなると道德と云ふものが宗教になつて居るのです。道德と宗教と此の時に於て一致して居る。即ちカントの此の時の心持は釋迦が菩提樹の下に於ける時の心持と正に同じであると思ふ。つまり一方から言へば道德が宗教になつてしまつたのです。又一方からは其れと反對に、宗教が道德化したとも云へるのでせう。と云ふのはカントは天界に在る所の神、西方十萬億の彼方に在る所の佛を自分の心に持つて來てしまつて自分の心に見出した。だから宗教を道德化したと言へる。佛を人間化したと云へる。或は人間を佛にしたと云へる。さう云ふ所からして非常に感慨無量であつたと云ふことが分る。本當の所謂人間の品位といふものが分つて來た。源信僧都の歌に斯う云ふのがある。源信僧都は比叡山の北の方の横川と云ふ所に大に修養して居つた人でありましたが、眞宗などでは第六番目の祖師として崇敬して居ります。

夜もすがら佛の道を求むれば

わが心にそ尋ね入りぬる

斯う云ふ風になつた處に於て初めて人間といふものゝ品位尊嚴が現れて居る。吾々人

間としては同胞である、吾々人間としては本當に兄弟であると云ふ、さう云ふ思想の根本は此處に在ると思ふ。

六

此の點は今私は釋迦とカントに就いて申したのでありますが、今日の教育に就いて申しても同じ事でありませう。今日の教育は啓發主義と云ふ。啓發といふ言葉は、つまり押付と云ふ言葉に反對して居るので、人間の有する本性を啓き現して行く、斯う云ふ意味です。教育の方に於て大切な人物である所のベスタロッチと云ふ人は貧者の友達となつて眞の教育をやつた。其のベスタロッチの教育主義も矢張り其處に在るので。彼の書いた「隱者の夕暮」といふ書物がありますが、其の中に書いてあることを見ますと、此の美しい人間の本性、此の嚴めしい、尊い人間の本性を引出さう。それはどんな處に於ても輝いて居ると、斯う云ふ信念からして彼は世の中から棄てられて居る所の哀れな兒童を集めて献身的の教育を行つたのであります。又之を基督教に見ましても、基督教の眞髓としても矢張り其處に在ると思ふ。所謂基督の愛、基督の平等主義、それは何う云ふ所から出て來たかと云つたら、矢張り人間の有する所の道德觀念が基礎となつて現れて來たのである。基督の元の教といふものは即ちモーゼの教で

ある。其のモーゼの教の崇めるエホバの神は元はイスラエルと云ふ民族の神である。他の民族の神ではない。イスラエル民族に限られた神様である。他の神様は他の民族を支配するが、併しイスラエル人は必ずエホバに據らなければならぬ。其のエホバの神は何う云ふ神であるかと云ふと誠に怖ろしい神様である。怖ろしい君主といふ觀念で支配されて居つた。所が其のエホバが基督に至つてはイスラエル人の神でなくして全世界の神様だと云ふことになつて來た。今一つは其の神様は怖るべき神でなくして愛なる父の神である。即ち今までは君主のやうな方であつたが、今度は父の様な方である。さう云ふ様に變つて來たのは、つまり基督に至つて明になつたのでありますけれども、それは前から段々發展して來たのである。

それは何う云ふ處から發展して來たのかと云ふと、舊約聖書の中には豫言者といふが澤山有ります。豫言者といふのは時代の改革者先覺者である。さう云ふ人が段々現れて來て、さうして宗教と云ふものが段々墮落して行くと云ふことに就て警戒し大聲疾呼して宗教の清新を叫んだ。則ちイスラエルの人民が段々悪い事を仕だした。又外國の神を祭る様になつた。つまり純粹のイスラエルの宗教が段々不純なものとなりて來た。そこで豫言者が叫んだ。如何にイスラエル人でも其様な悪い事をしては神様に

叱られる。殊に神様から放逐されるかも知れぬ。又外國の人民でも眞に善い事をするならば矢張エホバに守られると云ふ風に説いた。是は以前とは大なる相違である。以前はイスラエル民族がエホバに見放されるといふことは不可能である、それを考へることすら神に對する不信と思はれた。是れには矢張り道德といふことが主になつて、さうしてイスラエル人でも悪い事をすれば神から罰せられる、外國人でも善い事をすればエホバの神に守られると云ふ事になつた。そこで今度はエホバの神は單にイスラエル人の神でなくして世界萬民の神であるぞと云ふ考が段々出て來た。それは矢張り吾々の道德心が爾うなつて來たのである。吾々の道德心がさう云ふ愛なる神を造り出した。吾々の道德心が世界萬民の神を造り出したと謂つてもよい。矢張り基督教に於ても同じ事であると思ふ。

是等の點を綜合して觀ますると、吾々人間に就いて誠に言知れぬ深さ、言ひ知れぬ大なるものに遭遇して來なければならぬ。さう云ふ事に依つて吾々は眞に人間と云ふものを平等に觀て行く或る尊さ、又それに依つて吾々が四海同胞として連結さるべき一つの連鎖を其處に見出すことになる。

以上申した所は非常にゴテ／＼してお聽苦しい所があつたと思ひますが、尙一つ他

の方面からして申上げて見たいと思ひます。一寸休みませう。

(休憩)

七

先刻來人格主義に付て申述べましたが、人格主義の基礎を成して居るものは矢張り道德觀念であると思ふ。吾々の觀念の中の道德觀念といふものが謂はゞ奥深く心の内に藏して居る。さうして眞に人間をして平等と云ふ觀念を痛切に起させるものである。其の事を今一つ他の方面から申して見たいと思ふ。

人間と云ふ吾々の有つて居る力を見ますと、第一に現れて居るのは人間の物質的の力であります。吾々は其れを名づけて體力と云つて居る。其の體力と云ふ方面から申せば人間は餘り誇るに足りないと思ふ。何故かと云ふと、人間より以上の體力を有つて居るものがあるからです。即ち山野に駆廻つて居る所の熊なり虎なりと云ふものは遙に人間以上の體力を有して居る。又熊や虎よりも、もう一つ上のものがある。それは即ち自然の力である。熊なり虎なりと雖霹靂一聲、雷が落ちて來たら彼等は直ちに微塵にくだける。其の方から云へば人間と云ふものは實に微弱なものである。今度の關東地方の大地震に就いて考へても如何に人間の力が哀れなものであるかと云ふことが分る。所が人間は、さう云ふ自分より以上の體力を有つて居る所の虎なり熊なりを

捕まへて、さうして動物園に置いて慰め物にして居る。豪いことをやつて居る。のみならず又怖ろしい天然の力を利用して種々の人間の道具にして居る。空中の雷を捕まへて暗を照すことに利用し機械を運轉することに使つて居る。さう云ふ豪い力を人間は有つて居る。それは何であるか。それは所謂知力である。體力を動かす所の知力と云ふものがあつて、さう云ふ事をやる。斯うなるといふと知力は本當に人間的なものである。體力より云へば人間は到底他のものに伍するに足りないが、知力と云ふものが有つて初めて人間的と云へる。成程さう云ふ方から觀ると知力と云ふものが人間特有のもので、人間に至つて初めて知力と云ふものが大いに發達して來たのである。

身體の方で申すと、下等な動物から人間にまで發達して來た所を見ると其の發達の具合は非常に違ふ。即ち人間は斯う云ふ風に直立して居る。手足其の他のものが下等な動物とは非常に違つて居る。所が、斯う云ふ人間の身體が出來上がつてから後今日迄は、さう大した發達はない。即ち人間の中でも極く下等な人間の野蠻人とか未開人の身體と吾々の身體とを比較したならば、そんなに大した違ひはない。尤も彼等は唇が非常に厚いとか又は毛むくぢやらとか云ふやうなことがありますけれども、併し爾う大した違ひはない。吾々の中にも隨分唇の厚い人がある、毛むくぢやらの人もある。

色々ある。であるからこんな風の人間となつてからは身體の方では餘り發達をしない。これは神が理想の身體にしたものと見える。

所が、人間と云ふものになつてから後吾々高等の人間になるまでに違つて來たのは腦髓です。腦髓が非常に違つて來た。それ故に下等な人間即ち野蠻人などは腦髓の方から云ふと寧ろ吾々よりは獸の方に近い。臺灣の生蕃とか太平洋邊りの島に住んで居る土人の如きは腦髓の點に於ては吾々よりも寧ろ獸の方に近い。そこで彼等は身體に於ては吾々と殆ど同じだが腦髓が餘程劣つて居る、斯う云ふことが謂へるのです。

それで身體の方から言ひますと、下等な人間と高等な人間との差よりも下等な人間と高等な動物（猿とか猩々の類）との差の方が大きい。

下等人 ~ 高等人 > 下等人 ~ 高等獸類

所が腦髓の方から言ふと反對になる。下等人と高等人との差よりも下等人と高等獸類との差の方が少い。

下等人 ~ 高等人 < 下等人 ~ 高等獸類

斯う云ふことになる。即ち下等な人間は身體の方から云へば高等な人間に近い。腦髓から云へば高等獸類に近い。是は何う云ふことを示して居るか。即ち人間と云ふもの

が出来てから後の發達は身體の發達に非ずして腦髓が發達して來たのである。随つて人間の特色は腦髓即ち知力にある。知力の發達といふものが人間の人間たる所以である。斯う云ふ事になる。

併ながら知力といふものは亦其れ自身に放任して置いたならば其れだけ充分の價值を發揮することが出来ない。其の知力を動かす所のもう一つの力がなければならぬ。即ち知力のみであつたならば人間の社會的結合は破壊される。知力に任せて勝手次第にどんな事でもすると云ふやうな事になつたならば人間社會といふものは破壊されてしまふ。かの紙幣などを贋造する者は非常に知力のある人である。巧に紙幣を贋造する。それは偉い知力の用ひ處が誤つて居る者である。或る裁判官が紙幣贋造者の手を握つて泣いたといふ話がある。實にお前は立派な知能を有つて居るが、其の用ひ處を誤つた、惜いものだと言つて泣いた。さう云ふ風に用ひ處を誤るといふことになれば知力の十分の働きを現すことが出来ない。此に於て其の知力を働かす所の力がもう一つ奥になればならない。それは何であるかと云ふと所謂道德力である。即ち道德力と云ふものが最後に一つ有つて其れが知力を動かし其れが體力を動かすと云ふことに依つて茲に人間の活動が出来るのである。

もう一つ考へると、若し體力と云ふものに依つて人間の値打が定められると云ふ事になつたならば實に情ない。何故かと云ふと、體力から申すと天は實に不公平である。吾々は勿論身體の訓練と云ふことに依つて體力を養つて行くことが出来ませうけれども併ながら大體怯弱な者にも又強い者にも、さう生付けられて居るのであるから、さう云ふ事に依つて若しも人間の値打を定める標準にされたならば體力の弱い者は天の不公平に對して呪はなければならぬ。だから、さう云ふ不公平に與へられて居るものに依つて人間の價値の標準を定めることは何うしても出来ない。此に於て吾々は他の働きに其の標準を求めなければならぬ。所で知力は何うか。知力も矢張り實に不公平に分配されて居る。智慧の有る者と無い者とは非常な差である。勿論吾々は知を磨くべき責務を有つて居る。併ながら幾ら磨いても他の人に及ばぬと云ふのがある。是も天賦の能力で致方がない。私は多年高等學校をやつて居りまして随分其の點に付ては痛切に感ずるつであります。中學校までは大抵の人は何うか斯うか附いて行けるが、其れ以上の高等學校になると云ふと、もう附いて行けぬ。幾ら勉強しても能力の弱い者は一生懸命をやつて居りながら附いて行けぬ。實に天の不公平といふことを痛切に感ずる。そこで色々悲惨な出来事などが随分起つて来る。神經衰弱とか煩悶に陥

つて遂に自殺してしまふと云ふやうな事が起る。これは親たる者は餘程考へなければならぬ事である。或る程度までは行けるけれども或る程度以上は何うしても仕方がない。上の方になると天賦の能力と云ふものが非常に働いて来るのです。さう云ふ處を吾々は見せつけられて、如何にも天の分配と云ふものが有るとすれば其の不公平を感ずるのであります。だから知力の如何に依つて人間の價値を定めると云ふことをやつたならば是亦實に情ないと謂はなければならぬ。

そこで今度は道徳力です。體力を動かす知力を動かす力の潜んで居る所の道徳力を觀ますと、是だけは平等に賦與されて居る。之に付ては吾々は何等天に對して不平を想へることが出来ない。公平に與へられてある。それですから其の人の體力、其の人の知力を道徳的に働かせさへすれば人間としての價値があるのである。その人の體力其の人の知力如何に依つて色々地位が定まつて来るでありませうが、さう云ふ場合に於て、どんな地位に居つた所が、どう云ふ職業をやつて居つた所が、其れを道徳的に働かせることに依つて本當に其の人の價値が定まる。幾ら體力があつても知力があつても之を道徳的に働かせなければ駄目である。假令體力知力に於て劣る所があつても、其れが道徳的に働けば人間としての價値が十分に有る。白痴でない以上は道徳力

だけは人間に平等に與へられてある。故に人間としての價值を定める標準は其處に求めなければならぬ。又私共は人間と云ふものに就いて感謝の念を拂ふ所以も其處に在ると思ふ。それより外には何處にも無い。實に有難いといふ言葉を人間に對して發し得るのは其處に在る。随分人間に依つて色々變るでせう。或は藝術家となつて居る人もある、或は政治家となつて居る人もある。色々ある。さう云ふ事に依つて人間の値打が變るとするならば實に情ない、悲惨である。吾々は人間としての價值が十分に發揮されないといふことは残念であるから何處までも競争してでもやらなければならぬ。政治家が豪いと云へば政治家にならなければならぬ。藝術家が豪いと云へば藝術家にならなければならぬ。つまり世の中に淺ましい争闘が始まる。所が吾々は人間と云ふものゝ値打を發揮するには何もそんな事に争闘しなくても宜い。争闘せずとも吾々の分に應じて道德的に仕事をやつて行けば宜いと、斯う考へれば、ア、成程、そんならばと、ホツと一息吐くのである。そこで吾々は初めて人間と云ふものゝ有難味が分るのである。

道德力と云ふものは如何なる人にも皆其の内部に有るのでありまして、支那の孟子は之を名づけて浩然之氣と云ひました。浩然之氣と云ふのは道德力である。「敢問。何

謂浩然之氣。曰難言也」とありまして、言ふことが六ヶ敷い。成程先刻申した第一義諦の道德思想は中々口に言表はすことが六ヶ敷い。口に言表はすといふと二流三流に下る。併しながら其の浩然之氣と云ふものは如何なる人の内にも在る。蘇東坡と云ふ人は支那の名高い學者の韓文公の石碑を書いて其の中に斯う云ふことを云つて居る。孟子曰。我善養吾浩然之氣。是氣也。寓於尋常之中而塞乎天地之間。——極く平凡な人間の中に在つて、さうして天地の間にも擴がる。さう云ふ偉大なものであると云ふのです。卒然遇之則王公失其貴——若しも卒然として之に遇つたならば王公と雖も其の貴さを失つてしまふ。晋楚失其富——晋楚は支那の金持です。良平失其智。賁育失其勇。儀秦失其辯——蘇秦張儀のやうな辯舌家と雖も其の辯を失つてしまふ。斯う云ふ風な浩然之氣と云ふものが誰人の内にも有る。それは王侯貴人の内にも有るし車夫馬丁の内にも有る。如何なる人にも有る。其れを發揮すると發揮しないと其は吾々の責任である。本當の人間の値打と云ふものは其處から定まつて來なければならぬ。又其れが人間として有難い點である。吾々の有つて居るものに依つて標準が定まつて來ると云ふことになれば其處が人間の有難い點であると思ふ。例へば教育家の中にも大學の先生、中學の先生、小學の先生と色々ある。けれども大學の先生だから尊い、

小學の先生だから卑いと、そんな事はない。小學の先生にして道德力を以て其の職務を働かして行く人ならば、道德力を發揮しない大學の先生よりも人間としての値打がある。又一兵卒であつても道德的に兵卒の職務を働かして行く人ならば、道德的に働かない大將よりも其の兵卒の方が偉い。斯う云ふ事になる。さう云ふ風に標準が定まるとなれば、人間としての有難味は其れより外に無い。さう云ふに如何なる人も平等に道德力が賦與されて居る其處に人間的の處がある。

八

斯う云ふ風に観るといふと、即ち人間と云ふものゝ基礎を造つて居る所謂人格の基礎は吾々の道德觀念に在る。人間をして眞に人間たらしむる所謂人格の基礎にはさう云ふ尊いものを吾々が有つて居ると謂へると思ふ。そこで私は以上申した事を基礎として最後に地方改善に就いて少し申して見たいと思ひます。

地方改善と云ふ事に就きまして私は第一に地方の人が自敬心を發揮されたいと思ふ自分が偉い。——偉いと云ふと所謂自尊心になる。自尊心でも宜いが傲慢の風と間違へられては困るから私は自敬と云ふ言葉を使つた方が宜いと思ふ。つまり自分が大切な人間だと云ふ觀念を有つことが第一であると思ふ。實際に於て皆がさう云ふ觀念を

發揮されて居るかといふと、十分に發揮されて居ない。先刻から段々申した様に、つまり吾々自ら天上天下唯我獨尊なのである。釋迦が天上天下唯我獨尊と言はれたのは釋迦一人の事ではない。即ち吾々人間の内部に深く立入つて見れば皆さういふ尊いものを有すると云ふことは先刻からお話する通りである。さう云ふ自敬の觀念がなければ到底地方と云ふものが立派に改善されて行くことは出来ない。地方に居ると或は斯う云ふ風に思ひ易くなりはしないかと思ふ。中央などに居つて大いに世界の廣い舞臺に活躍して居る人の方が偉い。自分などは地方の隅に居て死んだ所が生きた所が何も世界の舞臺に關係はない。斯う云ふ風に自分を輕んずる様なことが有りはしないか。それではいけない、本當に徹底的に自分と云ふものゝ尊敬すべき者であると思ふ。ことが必要である。中央の舞臺に立つて偉い働きをして居る人も偉いが、併ながら亦地方に居つて、自分は百姓なら百姓で鋤鎌を執つて深く地面に喰入れるのは總理大臣が議會に於て演説をするのと同じ價值を有つて居る、外務大臣が世界を相手に談判するのと同じ事だ、道德的にやつて居れば其方が寧ろ偉いのだと云ふ様に、さう云ふ徹底的の自敬の念が必要である。亞米利加のブライアンと云ふ人がある。大統領の候補者として三遍も争つて三遍ともなることが出来ませぬでしたが、あのブライアンが丁度

日露戦争が済んでから日本に來ました。其の時分に早稻田大學で演説を致しましたが、其の演説の終りに斯う云ふことを言ひました。どうか諸君は斯う云ふ理想を抱いて働いて呉れ。若し自分が今日死んだならば世界は今日よりも一層暗黒になる。斯う云ふ理想を抱いて働いて呉れと言つて結びました。私は其の言葉に非常に感激をして今日尙あり／＼と耳に残つて居りますが、實に其の通りで、吾々は縦令田舎の隅に居つても、若し自分一人が今居なくなつたならば世界は今日よりもヨリ暗黒になるぞと、斯う云ふ觀念を有つて働かなければならぬ。又實際其の通りなのです。

併ながら私はどうも其の點に於て遺憾に思ふことがある。例へば在郷軍人です。在郷軍人の成績が擧がらぬ擧がらぬと云ふことを方々から聞くが、私は不可思議に思ふ。一體軍人としては世界で模範的の軍人であつた者が、在郷軍人として模範的の農夫になれぬと云ふのは何う云ふ譯か。軍人として世界の模範的の軍人であつたならば郷里に歸つて模範的の百姓、模範的の商人になれぬ筈がない。然るに然うならぬのは私は自敬觀念の如何に因ると思ふ。軍人としては自分は偉いぞと考へる。日本の軍人としては世界の先頭に立つ可きものだぞと云ふ自敬の觀念が非常にあつた。所が扱在郷軍人として郷里に歸つてからも矢張りさう云ふ自敬の觀念が有るか、即ち百姓をし商賣

をして居つて其れが有るかと思ふ。無いから在郷軍人の成績が擧がらぬと云ふ事になるものと思ふ。其の點に於て私は未だ地方の人に此の自敬の觀念が徹底してゐないと思ふ。如何なる人も眞にさう云ふ自敬の觀念を有つと云ふことが地方改善の第一義になつて來る。

次には何か。今申した自敬の觀念は何う云ふ所から起るかと思ふと、自分は人格者だ、自分は人格の貴いものを有つて居ると云ふ所から來る。其れからして次に當然起つて來るのは何かと思ふと人格的の結合です。是が第二です。吾々の隣人、吾々の村の人即ち地方と人格的の結合をすると云ふことが地方改善に付て大切な事である。勿論吾々は自敬の念と云ふものが必要であるが、一方に於て其れが尊大に流れ傲慢に陥りて自分獨りだけ偉い／＼と思つて居つてはいかぬ。もう一つ翼がある。それは社會と協同一致して行くことである。併ながら單に協同一致すると云ふだけでは私の申す趣意が十分に徹底しない。そこで人格的に結合すると云ふことを特に申したい。是れは自敬と云ふ事から當然來なければならぬ。即ち先刻カントの事を申したのは其處に在る。吾々は自分が人格者である。自分が人格者であると共に自分も亦他人の人格を認めなければならぬ。他人の人格を認めると云ふ事が自分の人格者であると云ふこ

どの必要條件である。自分が人格者であると云ふことからして、當然の答案として他人の人格を認めると云ふことになる。他人の人格を認めることが即ち自分の人格を尊敬する所以である。斯う云ふ人格的の結合に依つて初めて吾々は本當の社會を成すことが出来るのである。將來の社會は何うしても此の人格的の結合に依つて現れて來なければならぬと思ふ。遺憾ながら今日はまだ人格的の結合といふ程度に十分に達して居りませぬが、吾々は何處迄もさう云ふ趣意で進んで行かなければならない。

吾々は一方から言へば一個の立派な紳士である。或は君子といふ言葉を用ひても宜いが、皆紳士或は君子と云はるべき人である。それと同時に吾々は自分の便益自分の享樂のために他人の便益他人の享樂を侵すべきでない。或る點に於ては自分の享樂を禁じても自分の便益を犠牲にしても他人の人格と共に生きて行くことを樂みとしなければならぬ。茲に私が人格的の結合と申しましたのは、吾々が對象即ち相手を本當に人格者として尊敬しなければならぬのであつて、相手をば物質的慾望の塊りと思つてはいけない。若しも相手を物質的慾望の塊りと思つたならば、それは人格者としての尊敬ではない。即ち人格者は其の相手として人格者を要求する。それですから例へば斯う云ふ風なことになつてはいけない。お婆さんなどが孫を溺愛する。さうして唯

飲みたいとか食ひたいとか云ふ様な慾望の塊りと思つて居る。飲みたいと云へば飲ませる、食べたいと云へば食べさす。着物も無闇に厚着をさせる。あれは自分の人格の低いことを暴露して居るのである。詰り孫をば本當の人格者として扱つて居ないので。さうして肉體上の慾望の塊りとしか思つてゐない。自分の虚榮の塊りとしか思つてゐない。幼い子供に長いすくした立派な着物を着せて、それを見せびらかして自慢にして居る。まるで子供を人形の様に思つて居る。吾々地方に於て隣人に對する場合にさう云ふ風なものとも見てもいけない。或は又母親が娘の婿を擇ぶのに、先方には財産がどの位有るか容貌が何うとか、さう云ふ事のみを目的にして婿を擇ぶと云ふ人がある。これ等も母親の溺れた愛です。これも自分の娘と云ふものをば、唯さういふ外的のものに對する懐がれの塊りとして居つて、何等娘の人格を認めて居ないのである。娘を人格者として扱つて、自分の娘は若し不幸にして將來貧苦に迫つたやうな場合に於て大いに奮闘して人格を發揮し得るものと思つて居ない、又發揮させやうと考へて居ない。さう云ふ風な所謂愚な母親のやうな場合とも擇ばなければならぬ。吾々が地方に於て隣人と相對し隣人を愛する場合には人格的に愛するものでなければいけない。それが爲には場合に依つては重き負擔を與へ、苦しい目に遭はせ、又或る場合

には非常な犠牲を提供せしめて、さうして相共に人格の尊嚴を維持して行かうと、斯う云ふ風でなければなるまい。そこで初めて地方が本當に改善されるのである。

地方に於ては地主對小作人の争ひと云ふやうな事も段々起つて來ますし、又は勞働者對資本家と云ふ問題なども随分起つて來ますが、さう云ふ場合に於ても眞に人格的の結合が十分に行はれない間は何時までも其の争ひは續くことであると思ひます。又吾々が人格的結合の場合に於ては、自分が人格者であると云ふときには、何うしても一緒に手を携へて行くべき友を要求する。と云ふのは、人格を發揮しやうと云ふ場合には友が有つて決して損をしない。何か物質的の慾望を發揮しやうと云ふ場合には友が有ると損をするけれども、自分の人格を發揮しやうと云ふことならば吾々は友が有つて決して損をしない。若しも私が私の持つて居る所の物をば伴侶に與へて私の物が半分になつた。半分になつたが其の代りに私は其れが爲に貧苦に堪へると云ふ力が増して來る。伴侶を愛すると云ふことの爲に自分の貧苦に堪へる力が倍になつて來る。其れだけ人格の力が餘計に發揮される。であるから人格の發揮と云ふ事には却て友を要求する。どうしても吾々は自敬の觀念からして當然の結果として地方の隣人同胞相互に愛し相互に提携して進んで行かうといふ然う云ふ人格的の結合力が現れて來

なければならぬ。併ながら今日に於てはまださう云ふ理想の境に達してゐない。私自らを顧みましても、未ださう云ふ風に人格的に結合して行かうと云ふやうな境に十分達して居ないと云ふことを誠に愧べかしく思ひますが、併ながら將來の社會は是非共さう云ふ風な方向に進んで行かなければならぬと考へるのであります。

先づさう云ふ譯でありまして、是はつまり兩方の翼と云つて宜い。一方には自敬の觀念、一方に於ては隣人同胞と相提携する。此の兩方の翼に依つて地方が動いて行くべきであると思ひますが、さう云ふ事に依つて行くならば地方改善の問題は容易に解決されるであります。例へば小學校を一つ建設するにしても、其の位置の争ひの爲に二年も三年も解決しないと、色々の問題が解決されずに残つて行くと云ふやうな事は皆無くなつて來ると思ふ。

第三には差別觀念の撤廢であります。是は先刻申しました人格觀念の當然の結果として何うしても現れて來なければならぬ。吾々は色々な社會上の事相に當つて其處に相互の彼我の間に何等か一つの鬨があつては到底同胞相提携して行くと云ふことは出來ない。全く此の點に於ては差別相を撤廢しなければならぬ。先刻申しました釋迦の教にしても基督の教にしても、是等の宗教の方から云へば一體差別と云ふことは他迄

も無いのです。それ故に釋迦などは到る處に於て人間に差別を設けると云ふことを否定して居る。元來印度と云ふ所は非常に階級制度の盛な所である。今申すのは管々といから申しませぬが、印度は殊に釋迦の時代に於ては階級の争と云ふものが激しかった。さうして大きく別ければ四姓と云つて四つの階級になつて居る。第一が婆羅門です。これは僧侶の階級です。第二が刹利と云ふ。これは武族です。第三が毗舍、これは商工業の階級です。第四が須陀羅と云ふ。これは戦争に敗けた者であつて、所謂雇人になつて居る。今日で申せば労働者の階級です。此の四つに別かれて居りますが、殊に其の中で釋迦の時代には婆羅門と刹利との争といふものが非常なものであつて、釋迦は之を始終戒めて居ります。先刻來お話しした様に釋迦は所謂人格主義であるから、それが爲に四姓の差別は全然認めないで、釋迦の門に來れば皆同一になつて居る。それがお經の中に現れて居る。

釋迦の時代に起つた戀愛の話として摩登伽經と云ふお經があります。是は何う云ふお經かと云ふと、釋迦のお弟子の中に阿難尊者と云ふのがありまして、釋迦の従弟に當る人ですが、お弟子の中でも此の人は始終釋迦のお供をして歩いて居る。其の阿難尊者が非常に美しい坊さんであつたので或る乙女が戀をした。其の戀物語を書いてある

お經なのです。或時阿難尊者が舍利城に行つて戻つて來る途中で非常に咽喉が渴いて池の畔に立つて水を飲まうとした所が杓がない。恰も其處に一人の美しい乙女が瓶に綺麗な清水を汲んで居る。そこで阿難尊者が立寄つて、其の水を一杯飲まして呉れと云つた所が、其の乙女が「水は海と多く氷と冷かなる良き水なれば奉らんは更に惜しからねど」と言つて躊躇らうて居る。そこで阿難尊者が、何を憚つて飲まして呉れぬのかと問ふた。乙女が「大徳は尊き氏の人にして妾は栴陀羅の女なれば」と答へた。斯う云ふ譯だから水を上げられませぬと云つた。すると阿難が「四水海に入つて同一の流れ、四姓道に入つて同く釋子、我が心平等なれば異相を見ること無し」と言つた。即ち「四つの水も海に入つては差別がない、四つの姓も道に入つては同じく釋迦の御弟子である、我が心平等であれば異相を見ることはない、差別を見ない、どうか其の水の供養を受けたい」と、斯う云つて遂に其の水の供養を受けたのであります。此に於て其の乙女が阿難に對し痛切な戀愛を感じて何うしても阿難を戀ひ慕ふ心止め難くして、家に歸つて母親に頼む。母親といふ人は呪文を唱へて人を引付ける力がある。それから母親が火を焚きまして、呪文を書いて火の中に投入れて、阿難を自分の家に呼寄せせる。阿難は何となく心が引かれて自然と乙女の家に行く。乙女の家に行つて、其

處に於て阿難は我に反る。さうして釋迦牟尼如來を念じて再び釋迦の許に歸つてしまふのです。それから又乙女が阿難の許へ出かけて行つて戀慕の情を表す。釋迦が其れを知つて、お前は本當に阿難の妻になりたいか、阿難の妻になりたいならば宜しくお前は出家をして阿難と同じ道に入つたら宜からうと、斯う言聽かされて遂に乙女が出家してしまふ。斯う云ふ事を書いたお經です。是は一例でありますが、斯う云ふやうな例はお經の中に澤山あります。全く釋迦の門に入つては差別相を撤廢してしまふ。

釋迦入滅後印度に阿輪迦王と云ふ王様が出ました。阿育王とも云ふ。此の阿輪迦王は釋迦の教を最も能く弘めて佛法を國教にした王様であつて、政治的にも印度を統一した大王です。西洋で云へば基督教を國教にした羅馬のコンスタンチヌ大帝に比すべき人である。其の阿輪迦王の勅令と云ふものが澤山國民に宣布されて居りますが、今日までに地面の下から刻文となつて澤山堀出される其の勅令を見るといふと、實に差別撤廢と云ふことを度々繰返して鋭く説いて居る。さう云ふ點からして阿輪迦王の國家が段々繁榮に趣いて居る。それから日本では聖德太子です。聖德太子は日本の阿輪迦王と云つても宜い。即ち日本に佛教を十分に弘めた御方ではありますが、聖德太子の精神も矢張り其處に在りまして、先刻申した所の人物本位を以て出来るだけ努められ

たのであります。

斯う云ふ次第でありまして、段々世の中には色々な差別思想が起つて來て其處へ偉大な宗教家が出て來て其の思想を取除いて元の狀況に戻して行かうと云ふ事になるのであります。つまり宗教の方から云ひ又教育の方から申しまして、先刻お話ししたやうな人物本位の主義から行けば、飽くまで差別思想を撤廢して行くべきであつて、是が有つては地方の改善と云ふことは到底出來ない。地方を立派に改善する爲には矢張り阿輪迦王の天下の如く、又聖德太子の天下の如くに、何處迄も差別思想が撤廢されて人物本位にならなければならない。

又是は恐らくは喜田博士からお話があつた事と思ひますから私は詳しくは申しませぬが、我が日本の國家の源に遡つて考へますと、成可く差別思想を撤廢しやうとしたのであります。即ち我が皇祖皇宗の偉大なる思召は其處に在るのです。どんなものでも成可く之を抱容する。寧ろ攝取と云ふ言葉は日本の國民性を表すに誠に適當な言葉である。佛の光明の中に衆生を悉く攝取するといふ時に用ゐられた攝取の言葉です。我が皇祖皇宗は異民族を皆攝取なされた。其の最も大なるものは大和民族と出雲系統の攝取抱容である。是は日本の元來の國民性と謂つて宜い。西洋で見る異民族の争と

云ふものは酷いものでありましたが、西洋のは元來が階級的なものです。日本のは極く寛容的で、假令人種が異つても其れを旨く包容して行く。それが日本國民の特色である。況や同じ民族の間に於てをや其處に何等の差別が認められない。そこで日本國民の繁榮の基礎が築かれて居る。然るに段々末に流れて來ると種々なる事から差別思想が起つて來る。そこで吾々は一つ源に遡らなければならぬと思ふ。先般御下しになつた詔書の中にも「源に遡れ」と仰せられてあるのは其處なのです。我が國家建設の最初の時に遡つて見ると實に偉大なる抱容力を有して居つて、區々たる差別と云ふものは全く見ないで、さうして團結の力を現して居る。さう云ふ源に吾々は遡ると云ふことが必要である。宗教上教育上或は國民性の方から言つても須らく源に遡つて而して總ての人間に關する差別を撤廢して同心一致して進まなければならぬ。又今後の問題としては一層進んで即ち同じ我が日本國民の中に這入つて來た所の朝鮮人と云ふものを吾々は攝取しなければならぬ。是が亦日本國民の一つの職務になつて居るのであります。斯う云ふ場合に於て尙我が國內に差別思想の有ると云ふことは甚だ日本國民の恥辱であると思ふ。西洋人は動もすれば差別を付けたがる。此の點に於ては日本人の方が誠に寛大な精神を有つて居る。どうか此の特質を十分に發揮したいと考へるの

であります。

甚だ粗末な散漫なお話を致しまして申譯がありませんが是で止めます。

(拍手)

教育及宗教上より觀たる地方改善事業(終)

大正十三年九月

日印刷
日發行

非賣品

但希望者ニ限り
實費十錢

地方改善事業叢書

教育及宗教上より觀たる
地方改善事業

發行人

今

井兼寬

寬

印刷人

刈

屋卓一郎

郎

印刷所

卓

山堂印刷部

部

東京市小石川區東青柳町二三

東京市小石川區大塚坂下町一五五

發行所

財團法人

中央社會事業協會

地方改善部

1-28W-22

終